

第12号 ぶんきんニュース

2008/10/15



ぶんせき秘帖集合写真

目 次

| | |
|-------------------------------|------|
| ☆ 会員増強キャンペーン | p. 2 |
| ☆ 行事予定 | |
| ・ 第2回 基礎分析化学講習 | p. 2 |
| ・ 第3回 基礎分析化学講習 | p. 3 |
| ・ 第3回 提案公募型セミナー | p. 4 |
| ☆ 報 告 | |
| ・ 第1回基礎分析化学実習 「水圏における試料採取、処理」 | p. 5 |
| ・ 2007年度 第一期 近畿分析技術研究国際交流助成 | p. 6 |
| ・ 平成夏期セミナー ぶんせき秘帖 | p. 8 |

仲間をふやそう！-会員増強キャンペーン

多くの学会でこの数年、会員数が減少しています。分析化学会もそのご他聞にもれず、会員数が減少し、歯止めが十分にはかからない状況です。多くの学会におけるここ数年の会員数の減少の最大の原因は、言うまでもなく、団塊世代が定年を迎えつつあるということです。このほかにも、若者の学会離れ、企業の学会離れ、多くの新しい学会の誕生などいろいろ考えられます。特定の最先端のテーマに絞った中小規模の学会が比較的活況を呈しているのに対し、幅広い分野をカバーする伝統的な学会において会員数が減少しているのも最近の特徴です。

分析化学会の会員数も以前は8000人を越えていましたが、いまでは7000人台になっており、このまま減少が続くと危機的な状況になりかねません。分析化学は非常に幅広い分野の学問の基礎であるばかりでなく、地球環境問題、食品衛生問題、人の命の問題などありとあらゆる問題の解決の基礎となる学問です。もし分析化学会の弱体化が起これば国にとっても大変な事です。学会本部

でも会員増強運動を行っていますが、近畿支部でも強力にこれを押し進めたいと思います。何をやるにも仲間が必要です。仲間が減っていくと大変な事になります。

会員増強運動では、会員を増やすと共に辞める会員を説得する事も大切です。いずれにおきましても分析化学会の魅力とは何かをはっきりと知ってもらう事が大切だと思います。近畿支部では各種講習会のほかに、提案公募型セミナー、平成ぶんせき秘帖、琵琶湖での水質検査の実習、若手奨励賞、国際会議出席費援助など数多くの魅力あるイベントや制度があります。これはおおきな学会だからこそ出来る魅力だと思います。今後はシニア会員にとって魅力ある行事も考えなければならないと思っています。

皆さんの協力をお願いします。なお、本部から届いた「ぶんせき」の見本誌がありますので、必要な方は尾崎(ozaki@kwansei.ac.jp)までご連絡ください。

(関西学院大学 尾崎 幸洋)

行事予定

第2回基礎分析化学実習

主催：日本分析化学会近畿支部、近畿分析技術研究懇話会

期 日：平成20年10月22日（水） 13:00～17:00

場 所：紀本電子工業（株）[大阪市天王寺区舟橋町 3-1]

<交通>JR環状線「鶴橋」駅下車、北へ徒歩約5分。

詳細は、<http://www.kimoto-electric.co.jp/> をご参照下さい。

内 容：基本的な受動素子とオペアンプによる増幅回路の働きを学習し、電子回路実装、動作確認を行う。

今年の実習課題は「ポテンショスタット回路」。

講師：紀本岳志、鈴江崇彦（紀本電子） 他

参加人数：10名程度

費用：参加費：一般2000円、学生1000円、

近畿分析技術研究懇話会会員は無料。

機材費：（実習後持ち帰り）7000円程度

申込方法：「第2回基礎分析化学実習（10/22開催）」参加と明記のうえ、

(1)受講者氏名、(2)勤務先、(3)連絡先（郵便番号、住所、所属、電話・FAX番号、E-mailアドレス）を記入し、下記宛にお申込下さい。

問合・申込先：（社）日本分析化学会近畿支部

〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4

大阪科学技術センター6階

電話:06-6441-5531 Fax:06-6443-6685

E-mail:mail@bunkin.org

第3回基礎分析化学実習

主催：日本分析化学会近畿支部・近畿分析技術研究懇話会

日時：2008年11月8日（土）13:00～19:00

会場：京都大学化学研究所 本館3階新セミナー室

京都府宇治市五ヶ庄

内容：ICP-MSによる水試料中微量金属分析についての講義と実習

講師：宗林由樹（京大）他

- ・講義（ICP-MSによる微量金属分析の基礎）
- ・実験実習（器具洗浄、標準溶液調製、ろ過、ICP-MS測定）
- ・実験室見学
- ・懇談会

参加申込締切：申込締切：10月31日（金）（定員12名になり次第締切）

参加費：2000円（学生1000円、近畿分析技術研究懇話会会員は無料）

申込方法：「第3回基礎分析化学実習（11/8開催）」参加と明記のうえ、(1)受講者氏名、(2)勤務先、(3)連絡先（郵便番号、住所、所属、電話・FAX番号、E-mailアドレス）を記入し、下記宛にお申込下さい。

問合・申込先：（社）日本分析化学会近畿支部

〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4 大阪科学技術センター6階

電話:06-6441-5531 Fax:06-6443-6685 E-mail:mail@bunkin.org

第3回提案公募型セミナー

「水圏の腐植物質研究会」

主催：日本分析化学会近畿支部・近畿分析技術研究懇話会

期日：2008年11月29日（土） 13:00～17:40

会場：神戸大学農学部 B101教室

（神戸市灘区六甲台町1-1）

＜交通＞阪神「御影」駅、JR「六甲道」駅、阪急「六甲」駅から神戸市バス36系統鶴甲団地行、鶴甲2丁目止まり行き乗車「神大文理農学部前」下車、または阪急「六甲」駅から徒歩約15～20分。

内容

腐植物質とは、植物を中心とした生物体を起源とし、それらが生物・化学反応などにより変質してできた有機物質群のことであり、土壌、水圏、堆積物、食品、生体等の中に普遍的かつ多量に見いだされる。水圏において腐植物質は有害化学物質や微量金属などの挙動性に大きく関与し、太陽光の水中への透過性を支配し、バクテリアのエネルギー源になるなど、生態系で重要な役割を果たしている。本研究会は湖沼や河川水などに溶存する腐植物質の分布・構造・機能などについて議論を行い、分析化学および環境化学的理解を深めることを目的とする。

講演者（敬称略）

大田啓一（滋賀県立大学・環境科学部）

山田 悦（京都工芸繊維大学・環境科学センター）

藤嶽暢英（神戸大学・農学部）

丸尾雅啓（滋賀県立大学・環境科学部）

杉山裕子（兵庫県立大学・環境人間学部）

参加費：無料

申込締切日：11月24日（月）

申込方法：「第3回提案公募型セミナー参加」と明記のうえ、（1）受講者氏名、（2）勤務先（所属）、（3）連絡先（郵便番号、住所、所属、TEL、FAX、E-mail）を記入し、FAXもしくはE-mailでお申込下さい。

申込・問合せ先：（社）日本分析化学会近畿支部

〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4 大阪科学技術センター6階

電話：06-6441-5531 Fax：06-6443-6685 E-mail：mail@bunkin.org

報 告

2008 年度第 1 回基礎分析化学実習

「水圏における試料採取、処理」

日時：平成 20 年 8 月 7 日（木）9:00～14:00

会場：滋賀県立大学湖沼環境実験施設および実習調査船「はっさか」

2008 年 8 月 7 日（木）、滋賀県立大学湖沼環境実験施設（滋賀県彦根市）において、日本分析化学会近畿支部が主催する今年度最初の基礎分析化学実習“水圏における試料採取、処理”を開催した。琵琶湖における実際の試料採取を行うため、今年度も午前からの開始となった。遠方での実施にもかかわらず、定員 15 名に対し 14 名（当日欠席 2 名）から申込があった。



最初に施設内の実験室に試水採取の基本である種々の採水器、採泥器、プランクトンネットなどの器具について説明を行った。また、試料水の保存容器について材質の異なる容器を示し、目的に対する適合性について説明した。

約 1 時間の説明の後、港を出航して実習に移った。昨年度は台風の影響もあり、水深が浅く、いつでも帰港できる体制であっ

たが、今年は天候もよく、湖岸からかなり離れた多景島の沖（水深約 50m）で実習を行うことができた。微量金属用の採水によく用いられるニスキン式採水器を例に、採水器の原理を説明、セッティング、メッセージャーの投入を行い、水深別に採水を行った。水温躍層の発達している時期であることから、表層だけでなく、深度別の採水を行い、水深 40m 付近で採取した水にふれ、湖水が水温によって密度成層することを実感した。



次に湖の底質について、アクリルパイプ製 KK 式採泥器により、堆積物コアを採取した。粥状の有機物が浮遊し、還元状態の湖底から溶出した Fe(II) が、酸素に触れて酸化鉄と化したために赤みを帯びた泥の表面、直下の還元的で黒色の泥の層を確認した。さら採泥器から抜き取ったあと、実際

の泥に触れてもらった。

また、最後にプランクトンネットで動物プランクトンを採取し、実験室に持ち帰り実体顕微鏡を用いて琵琶湖に生息するプランクトンを観察、同定した。



今回の参加者の方々も、昨年同様熱心に受講いただき、予定時間を 30 分超過することになりました。普段実験室でふれることのない器具や生物を見学いただいたことから、「おもしろかったです」との感想を直接聞くことができた。今後実試料分析に際して、この実習がお役に立てば幸いです。

最後になりましたが、今年度も施設の海外文一郎技師に船の運転、船上作業等いろいろとお助けいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

(滋賀県立大学環境科学部 丸尾雅啓)

2007 年度第一期近畿分析技術研究国際交流助成

国際研究集会参加：6th Asian Conference on Electrochemistry in Taipei

東方美人の楽しみ

北隅優希（京都大学大学院工学研究科）

国際交流助成を受けて国際会議に参加したので、その報告をする。

会議は 6th Asian Conference on Electrochemistry in Taipei、アジアにおける電気化学の会議であり、会期は 2008 年 5 月 11 日から 5 月 14 日だった。会場は台北駅から北に 1 時間 30 分ほど歩いたところにある 劍潭海外青年活動中心 (Chientan Overseas Youth Activity Center) であり、発表件数はおよそ 400 件だった。

私は電気化学一般という区分で登録し、界面活性イオンの油水界面における吸着の電位依存性に関するポスター発表をした。この会議に参加して強く感じたことは、アジアにおける電気化学者の興味の大部分は電池とセンサーに向けられていることである。私の

区分における発表者は非常に少なかった。興味の方向が異なっている人を引き付けるためには、そのための努力が必要であることを痛感した。これがこの会議に出席したことで得た一番の収穫である。

いろいろと思いの多い会議だったのだが、一番印象に残ったのは、自分の名前がプログラムに入っていなかったことである。学生ポスター賞に申し込みあわよくばポスター賞を、と思っていたのだが、暫定版のプログラムが公開されると、そこに自分の名前はなかった。助成を受けた手前、会議で発表しないわけにもいけないので、世話人に連絡をしたのだが、何とも手ごたえのない対応であった。結局、最終版のプログラムにも自分の名前は無く、発表に関しては台湾に渡ってか

ら考えることにした。

台湾の空港から会場までの移動が順調にすまなかったのが、会場に着いたら歓迎式典が終わっていた。見たことのある顔が何人か会場から出てくるのとすれ違った。残念無念。悔しいので、会場の近くにある夜市で夕食を食べた。台湾の方は大変に親日的な雰囲気、屋台のおばちゃんが日本語を随所に混ぜて料理の説明をしてくれた。このときの料理は上々だったのだが、コンビニで手に入れたトマトジュースは蜂蜜で甘みがつけてあってびっくりした。

問題のポスターであるが、ポスター会場で状況を説明したら、番号の振っていないパネルに掲示してよいとのことであった。ただし、学生ポスター賞への参加はあきらめてくれとのこと。こちらとしては発表できればよいという気分だったので、文句もなかった。ちなみに会場のパネルの半分くらいに番号の振っていない、何とも大らかな会議だった。

この会議のポスターセッションは、コアタイムの設定がなく、午前8時から午後5時まで掲示してよいというものであった。正直言って、このやり方は失敗だと思う。ポスター会場の人出もまばらで、いつ人がくるのか予想できず、しかも時間が長いので、すれ違いになるのである。何はともあれ、発表は無事終了した。今思うと、番号の振っていないパネルは常に余っていたので、期間中ずっとポスターを掲示するくらいの気概で臨めばよかった。

さて、本文のタイトルにある東方美人とは、東方美人茶という烏龍茶のことである。台湾土産として、茶を買ってこいリクエストがあったので、ガイドを参考にしつつ、台北市内のある茶屋に入った。その店の店主は日本語が達者で（そもそもそういう店を探して入ったのだが）いろいろと解説をつけながらさま

ざまな茶を試飲させてくれたのである。その中でとりわけ旨いと感じたの件の東方美人であった。このとき感じた感動は、嗜好品に金をかけるなど言語道断と思って生きてきた自分が、これだけ旨いなら金を出してもいいかなと思ったほどである。そのようなわけで、東方美人茶を初めとする烏龍茶を土産として帰国したのである。

購入した東方美人茶を、これはとても旨い茶であると人に振舞ったのだが、旨くなかった。香りは出るけど、味が出ない。私を感動させた優しい甘さがまったく出てこないのである。腕が悪いのだろうが、美味しい茶が淹れられるようになる前に、おそらく茶葉が無くなってしまおうだろう。さて、店主はいくつかいい話をしてくれた。印象的なのは、「茶の入れ方に基本はあるけど、それにこだわらず、その人が最も旨いと思う淹れ方をすべきである」、「東方美人茶は生産量が少ないから、紅茶などで増量した模造品が広く出回っている」この二つである。



写真：今回の会議が押さえていた宿のうち高級なほう。外装は派手だが客室についてよい話を聞くことはなかった。写真では判りづらいが、とても鮮やかな彩色である。

ぶんせき秘帖報告

平成2008年8月19日～21日の3日間、琵琶湖畔の白浜荘にて、第二回分析化学会近畿支部夏季セミナー～ぶんせき秘帖巻ノ式～が開催された。

初日は兵庫県立大学名誉教授（現在は科学技術振興機構さきがけ「構造機能と計測分析」領域研究総括）の寺部茂先生の特別講演から始まった。「分離分析30年--今昔物語」と題されたこの講演では、そもそも分離分析の目的は何なのか？といった、ごくごく当たり前でありながらも真にそれを実行するこ

講演であった。

初日はこの講演後夕食をとり、ポスター発表兼懇親会を行った。これはポスター発表会場がそのまま懇親会場になっているもので、多くの参加者がざくばらんに話をするよい機会になったと思う。ここでは学生の研究発表のみならず、企業研究者による企業紹介ポスターもあり、大変盛況であった。

ポスター会場は夜9:30までであったが、もちろん懇親会はそれで終わることはなく、場所を学生の部屋に移して深夜まで懇親が



との難しさがひしひしと伝わってくるお話から始まり、氏の手がけてこられたミセル動電クロマトグラフィー開発の歴史を紐解く話題では、「MEKC」のネーミングも含め、真にオリジナルな研究とはどのように形成されていくのか、がひしひしと伝わってくる



続いた。

2日目午前には安川智之氏（兵庫県立大学大学院物質理学研究科）による「誘電泳動による微粒子操作の免疫測定への応用」、中村允氏（和歌山県工業技術センター）による「こ



れからの研究人生」、岩月聡史氏（甲南大学理工学部）による「格好悪くていいじゃないー研究も人生も」、寺田靖子氏（財団法人財団法人高輝度光科学研究センター（JASRI/Spring8））による「放射光マイクロビームの分析化学への応用」の講演があった。今回は、それぞれの講演者の方々に「自分が歩んできた研究人生の歩み」のようなものを語っていただくようお願いしていたが、中でも岩月氏の歩みは現在研究者を志す学生たちに、現実の厳しさと勇気を与える講演であったように思う。

2日目午後は「企業に就職する・企業で研究する」をテーマに、パネルディスカッションを行った。今回のパネリストは堀池重吉氏（株式会社島津製作所基盤研究所）、西原元基氏（ネオス株式会社人事部）、鈴江崇彦氏（紀本電子工業株式会社）、杉原崇康氏（住友電気工業株式会社）、田中喜秀氏（産業技術総合研究所関西センター）の5名であり、それぞれの方々の自己紹介プレゼンテーシ



ョン（5分ずつ）ののち、パネルディスカッションに入った。現在、就職を考えている大学院生も多かったため、会場から多くの質問が飛び出した。5名のパネリストの方々も非常にざくばらんに何でも語って下さる方々であったため、大変有意義な議論となった。また、企業人事部の方がパネリストになっていたことから、「どのような学生が来たら、正直、嫌だなと思いますか？」などのかなり厳しい質問も飛び交い、終了予定時間になっても話が尽きなかった。

今回は目の前が琵琶湖という環境であっ



たため、パネルディスカッション後、夕食のバーベキューまでは自由時間をとった。琵琶湖に飛び込む学生、テニスを楽しむ学生、バドミントンを楽しむ学生、部屋で話し込む学生など、それぞれに有意義な時間を過ごしていたように思う。その後のバーベキューでは某前支部長が例年通り（？）「宴会部長」のハッピーをまとい、懇親会の場を大いに盛り上



げてくださった。

バーベキューの後は、大阪府立大学八尾研究室の学生による学生企画で、グループ対抗クイズ大会を行った。参加者全員がグループに分かれて行ったグループ対抗でのクイズ大会は、参加者全員が楽しめるように工夫されたもので、大変盛り上がった。優勝チームにはゴムキャップやキムワイプ、サニメント手袋などの大変実用的(?)な賞品が贈呈された。この後は、ポスター発表第二弾で研究発表会、その後は初日に引き続き「夜の部」が遅くまで続いていた。

3日目の依頼講演は高橋弘樹氏(京都大学大学院人間・環境学研究科)による「研究のみぎひだり」、永井秀典氏による(産業技術総合研究所関西センター)「山椒は小粒でピリリと辛い! ~マイクロだからできること~」の2題があり、最後はポスター賞の表彰式を行った。本年度のポスター賞受賞者は、船木万壽郎君(大阪大学理学研究科 M1)、中江保一君(京都大学工学研究科 M2)、野田達夫君(大阪府立大学工学研究科 M2)、中村健君(関西学院大学理工学研究科 M1)、大久保文人君(大阪府立大学工学研究科 M1)の5名で、賞状と副賞(図書カード)の授与があった。

本会を開催するにあたり、糟野潤氏(龍谷大学)、北川文彦氏(京都大学)、山本孝氏(京都大学)、西直哉氏(京都大学)、諏訪雅頼氏(大阪大学)、宇田亮子氏(奈良工業高等専門学校)に実行委員を御引き受けいただいた。メール会議が主であったが、実行委員メンバー間のメールのやりとりで様々なアイデアが出た。中でも今回初めての試みであった企業人事部の方をお呼びしてのパネルディスカッションは、糟野氏のアイデアである。事務関係では、近畿支部事務局の才寺高英氏、

河合まゆみ氏、大阪府立大学八尾研究室事務の吉川直美氏に大変お世話になった。全員にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。また、今回は大阪府立大学八尾研究室の大学院生が裏方さんとして非常によく動いてくれた。今回は朝昼晩の食事当番があったため、毎回80名分の配膳作業があったり、また、夜の部のための冷えたビールの準備のための氷の注ぎ足し作業、さらには学生企画の企画運営までを担ってくれた。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

また、今回実行委員長を仰せつかって最も困ったことは、学生参加者の参加費を安く抑えるために、最初から赤字で費用設定したため、夜の部(?)の懇親会費をどこから捻出するか、という点であった。そこで、「ダメ元(?)」で近畿支部幹事全員にこの窮状を訴えるメールを出したところ、何とあつという間に35名(私が把握している人数のみ。実際はもっと多いと思われる。)を超える支部幹事の方々からビール券・ウイスキー・日本酒・ワイン・現金などが次々に届き、2泊3日のセミナー中の飲み物・軽食が全て賄われてしまったのみならず、次年度分も賄って余りあるほどのカンパが届いた。近畿支部会員の暖かい心意気を十分すぎるほどに感じることができ、正直、涙腺が緩む思いであった。実行委員長として、心から感謝申し上げます。本当に、どうもありがとうございました。次回は京都大学の山本孝氏が実行委員長をご快諾して下さい。来年は今年よりもさらに盛会になることを期待している。(大阪府立大学 久本秀明)

ぶんせき秘帖 卷ノ弐に参加して

寺部 茂 (兵庫県立大名誉)

近畿支部夏季セミナー実行委員長の久本秀明先生に頼まれて「ぶんせき秘帖巻ノ弐」で講演させていただき、さらに、「ぶんせきニュース」に原稿を頼まれたので、簡単な講演内容の紹介と感想を述べさせていただく。

日本分析化学会近畿支部若手の会は私が支部長を務めていたときに、近畿支部でも開催しようということになり、1997年から数回開催されたと思うが、いつの間にか途絶えてしまっていたようである。お世話する人が大変苦勞しなければならなかったし、参加者もあまり多くなかったのが原因ではないかと思う。新しい装いで昨年から発足したこの会に初めて参加して参加者の数に驚き、また、学生さんが多く若々しい雰囲気感動しました。お世話くださった実行委員会の先生方、お手伝いくださった多数の学生さんに感謝申し上げます。

講演は「分離分析の30年-今昔物語-」と題して私の学生時代から大学を定年退職するまでの間で分離分析に関与した30年を振り返って講演させていただきました。分離分析といってもほとんどがキャピラリー電気泳動(CE)およびミセル動電クロマトグラフィー(MEKC)の話になってしまったので、多くの参加者にはあまり馴染みのない話になってしまったと思います。ここでは科学的内容には触れず筆者の研究生生活における個人的回想を中心に書かせていただきます。

学生時代(学部および修士課程1962-1965)に所属した京大工学部工業化学科工業分析化学講座では、分析化学の講座ではあったが有機フッ素化学で合成研究をしていたので、全く分析化学の研究は行っていなかった。しかし、研究室では当時まだ新しかったガスク

ロマトグラフィー(GC)やカラムクロマトグラフィーの研究が行われており、分離分析についてはいくらか見習うことができた。卒業後、塩野義製薬(株)研究所に勤務するようになり、はじめの8年間は主に有機ラジカル反応について電子スピン共鳴法(ESR)を用いた研究を行っており、分析化学との関係は深くなかった。シオノギ研究所における状況も徐々に変化し、製薬に役立つ研究を行うように言われ、当時新しく始まった高速液体クロマトグラフィー(HPLC)の担当があいにく病気になったこともあり、その役を引き継ぐことになり分析化学に関係するようになった。HPLCに関する最新の知識、技術を学ぶためと称して、アリゾナ州立大学に1975年から2年間博士研究員として留学させてもらった。アメリカではクロマトグラフィーについてあまり多くを学んだわけではないが、HPLC用流動電流検出器の開発を思いつき、最後の半年間ほど真剣に研究した。帰国後はHPLCによるペプチドの分離を主に行い、HPLCが構造類似ペプチドの分離や純度試験に有用であることを示し、この分野の研究者に喜ばれた。会社の研究所だったので、各種ペプチド試料が容易に利用できたお陰であった。

1978年に塩野義製薬を退社して京大工学部の出身講座に助手として転勤し分析化学研究を行うことになった。転勤により経済的には家族に多大の迷惑をかけることになったが、自分自身にとっては好きな研究をしておればよく、精神的には充実した生活が始まった。2,3年は会社で行っていた研究の延長で、流動電流検出器および噴霧電位検出器の開発やペプチド、タンパク質の逆相HPLC

による分離を行っていた。しかし、せっかく大学に移ったのだから大学でなければできない研究をしなければと思い、テーマを模索した。当時の HPLC はキャピラリーGC に比べて分離性能は遙かに劣っていたので、なんとか HPLC で高性能分離を実現しようと思ひキャピラリー液体クロマトグラフィー (LC) を始めた。何せ貧乏研究室で学生さんを除いては足りないものばかりであった。当時名古屋大学工学部の石井大道教授の研究室で行われていたマイクロ LC に関する研究に興味をひかれ、それらを見習ってマイクロ LC 研究を始めた。マイクロ LC はほとんど手作り装置で実験でき、お金がなくとも他の研究室の装置を借りたりしながらなんとか始めることができた。当時京大理学部波多野博行教授が液体クロマトグラフ研究会を主宰されており、年 2 回研究会が開催されており、そこには国内の有名な研究者はもちろん外国の有名な研究者も参加されることが多く、この分野での初心者であった筆者には多数の研究者と接触するよい機会であり、学問的にも学ぶことが多かった。波多野先生の研究会では研究発表のみならず、分離分析における世界の最新情勢についての情報も多く提供され、国際会議に参加することの叶わなかった筆者には大変参考になった。

1981 年の波多野先生の研究会で、ノースカロライナ大学の Jorgenson 博士と言う若い研究者がキャピラリー電気泳動(CE)を行い優れた成果を発表したというニュースを知り、大変興味をそそられた。その後、*Anal. Chem.*, 53 (1981), 1298-1302 に発表された論文を見て衝撃を受けた。マイクロ LC よりも CE の方が面白そうだとすぐに研究に取りかかりたかったが、何せお金がなく装置を作るにも部品が買えず、早くも CE 研究を開始した当時名工大の津田孝雄先生の話聞きうらやましい思いをした。一方、たまたま日本化学会コロイドおよび界面化学部会の発行している *NEWSLETTER* 6 巻 3 号(May

1981)1 ページに掲載された中川俊夫博士の「可溶化現象に興味を持つ方への提言：可溶化クロマトグラフィー」という記事を読んだ。流動電流に興味を持っていたので日本化学会コロイドおよび界面化学部会に入会していたことと、中川俊夫博士がシオノギ研究所の先輩であったのでこの記事が目にとまったのである。電気泳動でミセルを利用して中性分子が分離できるのではと言う提案であり、すでに耳に入っていた CE でこの実験をしようと思った。なけなしの研究費をはたいてなんとか安物の高圧電源を購入し、マイクロ LC の技術を利用して CE 装置を自作できたのは 1982 年の夏であった。この頃からポリイミド樹脂を被覆したフューズドシリカキャピラリーが手に入るようになったばかりで、折れやすいガラスキャピラリーを用いなくてもよかった。初めて使ったキャピラリーは当時の波多野研の六鹿宗治先生に分けていただいたものだったと思う。できた装置を使って簡単なキャピラリーゾーン電気泳動(CZE)実験を試してみた。HPLC とは比べものにならない鋭いピークが観測され感激した。装置の性能は不十分であったが、懸案のミセルを用いた実験を行った。近くにあったアセチルアセトン、フェノール、メシチルオキシド、クレゾール異性体 3 種を混ぜたものを試料として分離を試みたところ、一度でききれいに分離できたのには興奮を抑えきれなかった。あまり興奮してその日は夜も眠れなかったことを思い出す。手当たり次第、試料を変えたり、分離条件を変えたり、装置を手直したりして実験を行い数ヶ月が経過した。後に MEKC と命名した方法の初めての結果がでた翌週に波多野先生の研究会で Jorgenson 博士と話す機会があり、クレゾール異性体 3 種の分離ができたことを話したところ、彼の目の色が変わった。単なるキャピラリーゾーン電気泳動(CZE)ではクレゾール異性体の分離ができないことは、彼は当然承知していたのでびっくりしたのだと思う。

こちらはまだ十分なデータを持っていなかったため、種明かしをするわけにはいかず、トリックを使ったと詳しい内容は話さなかった。

1983年1月の波多野先生の研究会でMEKCについて初めて発表した。何人かの先生には新しい成果を認めていただいたと思う。ともかく早く論文として発表しようと思ひ、Rapid Communicationのある *Analyst* に分離と簡単な理論の2報の速報として投稿したが、緊急性が低いとの理由で即、却下された。非常に落胆したが、それでは *Analytical Chemistry* の Correspondence に発表しようと思ひ、原稿を再構成して投稿した。こちらは好意的に評価されいくつかの修正の後受理された。問題となったのは方法の名称で、中川博士の提言を尊重して可溶化クロマトグラフィー (Solubilization Chromatography) と名づけて投稿したが、名称がよくないとのことで Electrokinetic Separation とせよとのコメントをもらい、他によい名前も思い浮かばず、論文を出版することを優先してその名称を受け入れた。方法の命名に関してはすでに何度も述べているので詳細は省くが、紆余曲折があり現在の名前に落ち着いたが、これは筆者の研究における大きな反省点の一つである。現役の研究者の皆さんには、自分で開発した新しい方法を命名するときには、覚えやすい、英語で略号が作りやすく発音しやすい、などを考慮して決めていただきたく思う。われわれの場合には強引に主張を通し続けたので、なんとか受け入れられたが賢いやり方ではなかった。

MEKC 研究が始まり少しずつ世間に認められるようになると、当然、競争相手も増えてくるので開発者の優位性を保つべく努力した。まず、一番大事なところは自分たちで独占しようと思ひ、基本的分離特性の解明、基礎理論の構築、方法論の拡張と問題点の解決を行おうと欲張った。研究の初期段階から現在京大工学部教授の大塚浩二先生に協力

していただいていたが、他に年1、2名の学生さんでは手が足りず、また、研究費も、研究スペースも足りず、一度に多くの課題を行うことはできなかった。CE 自体がまだ新しい方法で、市販装置が利用できるようになったのも1990年代に入ってからであり、それほど焦ることもなかった。MEKC 研究初期を振り返り言いたいことを書かせてもらえば、研究費配分に対する不満は年々積もっていった。科研費に関しては京大在職中の1990年までの12年間に、ペプチドのHPLC分析とMEKC 開発研究について一般研究(C)が一度ずつ採択されたのみである。MEKC 研究を始めてからは毎年一般研究1件、試験研究1件、応募可能なときには特定研究も応募していたが、全く採択されず毎年失望させられ、この研究課題で採択されないのであればどうしたらよいか見当もつかず、選考方法に強い不満を抱き落ち込んでいた。しかし、ありがたいことに日産財団の研究助成をいただくことができ、また、われわれの研究に初めから興味を持っていただいた横河電機(株)の花岡譲氏にいろいろ助けていただき、なんとか研究を少しずつ拡大できた。研究費はなかったが外国では評価していただき、論文発表間もなくから多くの国際会議にも招待されるようになった。でも研究費はなく、個人としても外国旅行に行く余裕はなく、何らかの援助なしには招待を受けるわけにはいかなかったが、ほとんどの場合、先方がかなり負担してくれ感謝している。とくに、*Analytical Chemistry* の Advisory Board (1990-1992) に招待されたのには驚いた。ほとんど無名の助教授であった筆者が、著名な先生方を差し置いて日本から招待されたのには、受けるべきか否か真剣に悩んだ。国際会議では自分が無名であったことはそれほど気にはならず、遠慮なく著名な先生方と親しくお話しができ、学問的内容のみでなく研究態度や外国研究者間の関係など多くのことを学んだ。よい研究はすぐに認めてくれ

るが、著名な先生の研究でも内容によっては全く評価されないことも知った。日本ではそのようなことを明確に述べてくれる先生は少ないが、外国では遠慮なしに批判が出るので、自信の持てない研究成果を発表するときは気が重かった。

MEKC 研究が佳境に入ってきた頃、新設の姫路工業大学理学部教授に応募するよう強制された。決して条件の悪い公募ではなかったが、新設であり少なくとも4年間は学生さんに研究を手伝ってもらえる状況ではなくなるので、やっと世間に認められるようになった研究を中断とまでは言えなくとも、大きく減速することはとても受け入れる気持ちにはならなかった。応募しても採用されなければと思いきや応募したのが間違いで、採用の通知が来た時はすぐにお断りした。しかし、教室からは転出せよとの強大な圧力がかかり、教室内で味方になってくれる有力者はおらず、転出せざるを得ない状況に追い込まれた。一番の心残りは、転出しなければならぬ理由を尋ねてもどの先生も何も説明してくれなかったことである。仕方ないので条件闘争に切り替えて、新任地で学生さんが研究室に配属されるまで京大の学生さんに手伝ってもらえるように配慮を求め、これは受け入れられたのでほっとした。姫路工大理学部では新設費用として使いきれないほどのお金をいただき、建物も建設中の時にお金を使わなければならないで困ったのは初めての経験であった。研究室の人事も公募ではあったが自由にさせていただくことができたが、自分で研究室を立ち上げる準備もできていなくて苦勞した。転勤2年目に建物もでき、設備も整い研究を始めることができるようになって、助教授と助手の3名のみでは思うように実験もできず、京大の学生さん頼みであった。なんとかしなければと思っているときさいわい、会社から研修員として優秀な方が2名来ていただけだったので非常にありがたかった。研究室の学生さんに研究を手伝って

もらえるようになるまでには時間もかかり、大学院まで進学してくれる学生さんも少なく、外国人に来てもらうように努力した。とくに学振の外国人特別研究員には多数応募させていただき、9名の優秀な研究者の協力を得られた。別に、自分で助成を持って研究に参加していただいた外国人研究者や、外国人留学生もかなりの数となり、研究遂行上大変助かった。ご存知のように、姫路工大(現在兵庫県立大)理学部は播磨科学公園都市という、都会から隔離された交通不便な地にあるので、研究に参加していただいた外国人には随分不便な思いをさせ、申し訳ない気持ちでいっぱいである。

姫路工大に移ってからの研究であるが、MEKC の基礎部分はかなり終わっていたので、MEKC 利用上の問題点の解決を中心に研究を進めた。主として、(1)中性試料のオンライン試料濃縮法の開発、(2)MEKC における質量分析法(MS)の利用、である。CE は絶対量では pg 以下の検出が可能な微量分析法であるが、吸光度検出器では濃度感度は μM が限度であり改善が必要であった。オンライン試料濃縮とは通常の操作よりもかなり大量の試料溶液を注入し、キャピラリー内で濃縮後分離する方法で、簡単に実行でき効果的な方法である。一般に CE の分析対象であるイオンについては当時すでにいくつかの方法が報告されていたが、中性試料の濃縮には適用できる方法はなかった。オンライン試料濃縮ができないことが MEKC の大きな欠点とするわけにはいかないので、我々がなんとかしなければと思い、当時フィリピンから国費留学で大学院に入学した Quirino 氏にこの課題を研究テーマとして与えた。非常に優秀な学生で、各種オンライン試料濃縮法を開発してくれ、とくに Sweeping と命名した濃縮法は全く新規で高い濃縮効率が得られる方法であった。中性分子のみならずイオンも濃縮できる方法で、短時間で広く受け入れられ応用例が増えてきた。Sweeping の命名に

は慎重になり、訪問中の外国人研究者の意見も聞き決定した。一方、MS 検出に関しては、エレクトロスプレーイオン化法(ESI)をインタフェースとしてCE-MS が行われていたが、ESI では溶液中のイオン強度が強いとイオン化効率が著しく悪くなるので、揮発性の緩衝液成分を用いて行われていた。従って、MEKC のようにイオン性ミセルを大量に含む溶液から試料をイオン化するのは困難であり、ほとんど研究されていなかった。MS 検出が利用できなくてはやはり MEKC の大きな欠点となるので、解決を迫られた。詳細は述べないが各種の方法を試みて、部分的に成功を収めたが、定年までに満足できる方法は開発できなかった。現在ではほぼ解決されているが、残念ながら MEKC が日常分析に用いられる例は少なく、MEKC-MS は一般的とはなっていない。

姫路工大に転勤後は不思議なことに科研費も何度も採択してもらえ、研究費は十分なくらいもらえるようになった。京大時代と比べて、研究費の額に比例して研究の質がよくなったかと言われると、決してそうはなっていない。自分で研究に割ける時間が減り、新しい分野で研究課題を見つけるのが難しくなったことと、MEKC、後にはCE全般で研究すべき課題がいくらかもあったことによる。言い換えれば、新分野を開拓するほどの能力と余裕がなかったことと、MEKC に関しては常に先導的研究をしなければと言う思いが強かったことによる。しかし、新規分野の開拓を試みるべきであった。

最後に、自分の研究を振り返り、若手研究者に次の点を述べておきたい。

研究の進め方について、

できるだけ生のデータを詳細に見る。

疑問点は自分で納得できるまで追求する。
優れた研究者の動向に注意を払う。

できるだけ多くの友人を作り、研究内容を自由に議論できるようにする。

研究成果発表について、

できるだけ国際会議で多数回発表する。

自分で納得できる論文を書く。

同業者が必ず読まなければならないような論文を書く。

読んだあと印象に残る論文を書く。

化学名、式、単位、有効数字は間違いなく。
学会について、

サービスと考えず、人脈の形成、情報源として利用。

政策提言ができるように心がける。

もう引退した気楽な身なので、もう少し勝手を言わせていただく。

日本の分離分析研究は世界的に認められるようになったか？

ひいき目に見れば世界一流の研究も多いが、米欧に比べてまだ独創性の高い研究の割合が少ない。若くから世界に名前を知られるような研究者の輩出を期待したい。

分離分析分野で日本発の新技术が近未来に生まれるか？

大学で分析化学研究、とくに分離分析研究を専門とする研究者が少なくなっている現状を思うと、数は少なくとも有能な若手研究者の成果に期待したい。分離分析は多数の研究者、技術者が利用しているので、応用研究は盛んであるが、大学では基礎研究を重視すべきである。分析技術としては「コツ」や「虎の巻」も必要と思うが、応用といえども基礎理論に基づいた思考がなければ新技术の開発は期待できない。

筆者のように民間会社勤務からアカデミアに移って研究を始めた者が、たまたま幸運に恵まれ能力以上の成果をあげることができたのは、家族を初め多くの研究協力者、友人、先輩に助けられたお陰と深く感謝しています。

ぶんせき秘帖～巻ノ弐～に参加して

船木 万壽郎（大阪大学理学研究科 M1）

この度の琵琶湖畔で開かれた第 2 回ぶんせき秘帖では、講演会やポスター発表、そしてパネルディスカッションが行われた。講演会での先生方のお話は研究内容のみならず、ご自身のこれまでの研究人生における紆余曲折など、研究者の先輩として大変ありがたいお言葉の数々であった。

夜に行われたポスター発表では、北京五輪女子ソフトボール日本代表が熱戦を繰り広げる裏で、50 名以上の若手研究者によって熱い議論が交わされた。私個人としてはこの場が初めてのポスター発表で、今思えば緊張や初陣が相俟って、拙い説明となってしまった。しかしながら、良くも悪くもこの場での発表は非常に良い経験となった。後々に分析化学年会でのポスター発表も控えていたので、場数を踏むという点で大変有意義なものであった。飲み物を片手に行うディスカッションは少々不思議な感じがしたが、今後に繋がる話ができたとと思う。

二日目に開かれたパネルディスカッションは、講師である企業の方々に普段はなかなか聞けないような質問をして、それに答えて頂くというものだった。ここでは“今の研究を企業に入っても活かせるか”や“企業が求めるのはどんな研究者か”など、まさに修士・博士課程の学生にとって“ど真ん中”な話題ばかりで大変に盛り上がった。

ぶんせき秘帖ではこのほかにも、学生企画によるクイズ大会や湖畔でのバーベキュー、そして懇親会も二晩にわたって行われた。講



演会などが有意義であったのは上で述べた通りであるが、このような学生同士の交流の場が設けられていたことも秘帖に参加して良かったと思う事の 1 つだ。実際にここで他大学のあるドクターの方に顔を覚えて頂いたので、後日年会でお会いしたときも、研究についてディスカッションすることができた。このような新たなコネクションを作ることができる場というのは、なかなか学生には無いのではないかと思う。3 日間にわたるこの夏季セミナーは、始まってまだ 2 年目と歴史は浅いが、大変貴重な若手研究者の交流の場だと思う。

最後に、ご自身の研究でお忙しい中ぶんせき秘帖～巻ノ弐～を企画運営してくださったセミナー実行委員の皆様、この場をお借りして感謝を申し上げます。

ぶんせき秘帖巻ノ式に参加して

中江保一 (京都大学大学院工学研究科 M2)

今回、琵琶湖西岸近江白浜で開催された日本分析化学会近畿支部第2回夏期セミナーに参加しました。行き帰りには激しい雷雨もあり、当初予定していた自転車での参加は見送らざるを得ませんでした。会期中は空気も澄み快適に過ごすことができました。私事ですが、博士課程の入学試験を間近に控えておりましたので、セミナーへの参加は思ってもいませんでした。しかしながら、先生に研究者としてやっていくのに参考になることも沢山有るから参加してみてもどうかと勧められて頂き参加することにしました。

講演では、分析化学の分野で活躍する諸先生方の波瀾に満ちた人生譚を伺うことができました。研究の話だけでなく、一筋縄では行かない人生を乗り切っていく為に必要な事の一部を学ぶことができました。その中でも、研究に必要なものは”OPQR (Originality, Priority, Quality, Rapidity)”の順であるけれど、駆け出しの人間はまずRだけでも出来るように心掛けなくてはならないというお話が印象的でした。何か他に忙しい事があるとついつい研究が後回しになりがちなの自分を戒めなくてはと感じました。

パネルディスカッションでは普段聞く事ができない企業の方の人事に関するとても興味深い話がありました。

ポスター発表では、『焦電結晶を用いたイオン化法の開発』というタイトルでポスター発表をさせて頂きました。焦電結晶に温度変化を与えた際に生じる高電圧を小型の電界イオン化源に応用する事を目的としています。幸いにも多くの方にポスター発表を聞いて頂くことができました。専門の異なる先生



方、企業の方、他大学の学生の方から頂いた鋭い質問、コメントはとても参考になるものでした。自分の研究に対する基礎的な理解の不足を痛感することになり、より一層の努力が必要であると感じました。また、思いもかけずポスター賞を頂くことができ、今後の研究の励みになりました。

学生企画も面白いクイズ大会が用意されており、化学に止まらず魚の名前等の出題もあり非常に盛り上がっていました。

学生は3部屋に分かれての雑魚寝という形でした。部活の合宿のような雰囲気の中で何気ない事から会話ができて、親睦を深めるのには良い形式であったと感じます。1泊目には他人行儀だった人とも2泊目にはだいぶ打ち解け、2日目の懇親会は随分と盛り上がっていました。

今回のセミナーに参加したことは研究生生活というこれまでに経験の無いものを考える上で大変意義深いことでありました。

最後に、今回のセミナーを企画、運営して下さいました皆様に感謝いたします。次回も参加させて頂きたいと思っています。

『 第二回 ぶんせき秘帖を経て 』

中村健（関西学院大学理工学部 M1）

日本分析化学会主催の第2回夏季セミナー『ぶんせき秘帖 巻ノ二』に今回初参加させていただきました。近畿圏内の各大学、高専及び企業の方々など多数の方が参加しておられ、総勢 80 人以上の大所帯となっていました。

そのため、自己紹介の時間も一分間と短い時間に限られていましたが、OHP を使用する等、各々工夫しておられ、非常に個性的かつ印象的でした。そのおかげで、参加者の方々と気兼ねなく接する事ができたように思います。また、2 年生という若い学生の方々の積極的な参加も見受けられ、今回のセミナーの規模と注目度の高さに驚かされました。

講演においては、7 名の諸先生方のお話を伺う事ができました。現在取り組んでおられる研究だけでなく、研究上の失敗談や趣味等プライベートな内容も織り交ぜられており、親しみ易いものとなっております。その上で若手研究者への教訓としてのメッセージもいただき、非常に有意義なものとなりました。また、今回初の試みであったパネルディスカッションでは、企業の方々のお話を伺う機会を設けていただけ、企業における研究や企業が必要とする人材、そうでない人材等、かなり踏み込んだ内容のお話を伺う事ができました。今後、就職活動を始めるに当たっての一つの指標になったと感じています。

2 日目の自由時間には、運動施設を利用したバドミントンやテニス等で体を動かしました。キャッチボールの際に、未だあまり会話を交わしていなかった参加者との交流もでき、楽しい時間を過ごす事ができました。BBQ の後の学生企画においては、チーム対抗の化学クイズ大会が行われました。チーム対抗戦という事で、一致団結してクイズに興じ



る事ができました。この様に、目上の方々と立場の違い等をあまり意識する事なく楽しい時間を過ごすことができる時間というのは、本セミナーならではの貴重な体験である様に感じました。

2 日間に渡るポスターセッションでは、学会とは異なり、アルコールを片手に発表・聴講というセミナー特有の気軽な雰囲気の中、多くの方々と意見交換でき、自分の携わっていない分野においても見識を広げる事ができました。また私自身の発表においても多くの方々に聴講していただき、今後の研究において参考になる貴重なご意見を数多く頂くことが出来ました。

2 泊 3 日という短い期間ではありましたが、分析に携わる多くの方々との出会い・交流、といった人との繋がりや新たな知識の獲得等、今後の生活においても非常に重要かつ有意義な時間を過ごさせていただきました。今回のセミナーを通して、研究者としても一個人としても成長できたと実感しています。今後是非参加させていただきたく思います。

最後になりましたが、会場の準備や司会進行等を取り仕切っていただいた大阪府立大学の皆様、そして参加者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

ぶんせき秘帖、雑記のぺえじー

大久保 文人（大阪府立大学大学院工学研究科 M1）

ようやく「ぶんせき秘帖」が終わり、ホッとしていたところにこの原稿執筆依頼が来て驚いているわけなんです…。

まずはじめに言わせていただきたいのは、久本先生をはじめ、今回の企画に携わってこられた先生方に「ありがとうございました」ということです。日々、研究に忙しいのにも関わらず、このような機会を設けていただいて本当にありがたいなと思いました。

続いて、今回の企画にあたってたくさんのカンパをしてくださった方々にも「ありがとうございました」といわせていただきます。おかげさまで近畿圏の分析化学を専攻する学生の皆さんと意義のある交流をすることが出来ました。本当にありがとうございました。

実を言うと、私は今回の「ぶんせき秘帖」に学生企画担当者の1人として携わらせていただきました。8月上旬、泣く泣く研究を犠牲にしなが企画の立案をさせていただいたのですが(笑)、当日は本当にみんなが盛り上がってくれるのか心配でたまりませんでした。当日は問題の難易度と点数のバランスが悪くて冷や汗をかきましたが、研究室のメンバーの機転と、お酒の力のお蔭でなんとか成功(?)させることが出来ました。本当にありがとうございました。参加していただいた皆さんにも感謝申し上げます。

さて、ようやく本題というか、原稿執筆の機会を頂くことになった原因についての言及です。このたびは若手優秀賞受賞の機会を頂き、本当にありがとうございました。ポスター発表の時間は、ほとんど互いの交流を滑らかにするための潤滑液(お酒)の準備及び



配布にいそしんでいたため、せいぜい3,4人の方には自分のポスターの説明が出来なかったのにもかかわらず、受賞するというのはなかなか腑に落ちない部分もあるといえはるのですが、この際なのでありがたく頂戴させていただきます。

しかし、改めて考えてみますと、この研究のアイデアはもともと、私を毎日指導してくださっている先生のものであるし、実験も先生の指導の下でやってきたものであるし、今回展示させていただいたポスターもやはり先生の綿密な校正を受けて作成したもので、何一つ自分の出した成果とはいえません。それなのに賞状には「若手研究者としての功績をうんたらかんたら…」という表記があり、この「若手研究者」という言葉に対して違和感というか重みというか、なんとも表現しがたい感情が心の中にわきあがってきました。

今後、自分が研究者としてのキャリアを歩んでいくことができるのか、定かではないですが、博士前期課程の残りの期間、本当の若手研究者を目指して、勇往邁進していきたいと存じます。

さて、このままだと、あまりぶんせき秘帖の紹介になっておらず、編集部の方から再提出を命じられても困るので、最後に少しだけぶんせき秘帖の中身についての感想も書いておきます。

今回はたくさんの先生方の発表を聞かせ頂きました。講演内容は研究テーマというよりも講師の先生がどんなキャリアを歩んできたかや、研究のモットーとしていることなどを話していただき、非常に参考となりました。私の中で印象に残っているのはOPQRのR、「Rapidity」という言葉です。Originality, Priority, Quality, Rapidityの順番に大切にしなければならないけれど、若いうちから

実践できることはせいぜいこの4つのうちのRぐらいしかないという話でした。ちなみに、このRapidityの意味は「何事もすぐ取り掛かるようにする」という風に私は解釈しました。確かにこの4つのうちで自分が実践できることとして、Rぐらいしかないんですよね。そんなわけで、自分としても、今後Rを強く意識していきたいと思います。

今回のぶんせき秘帖では、浪人時代に同じクラスだった人と会ったり、学生企画をさせていただいたり、いろいろなことがありましたが、どれも非常に有意義でした。本当にありがとうございました。

「ぶんせき秘帖」でのポスター発表

野田 達夫（大阪府立大学大学院工学研究科 M2）

2008年8月。北京オリンピックの女子ソフトボールが大いに盛り上がる中で行われた「ぶんせき秘帖」。ビールを片手に持ってポスター発表に参加し、幸運にもポスター賞を頂きました。私のポスターを気に入ってくれた方々、また夜の飲み会で仲良くなった方々のおかげです（笑）。「ぶんせき秘帖」について一筆書く機会を頂いたので、ポスター発表で感じたことについて少し話させて頂こうと思います。

皆さんよくご存知のように、ポスター発表は口頭発表と異なり発表者と聞き手による1対1のやりとりになります。私はどちらかと言えば引込み思案な性格なので、普段の学会ではなかなか発表している方に話し掛けることができないことが多いです。研究内容が気になるけど、自分の知識に自信がなく話し掛けることをためらってしまう…といった経験は、私だけでなく皆さんも一度は経験しているのではないのでしょうか。しかしよく考えてみれば、他人の研究でわからない部分



があるのは当然なんですよ。わからないならその人に納得いくまで説明してもらえばいい。「ぶんせき秘帖」で発表しているのは自分と同じ学生がほとんどの上、夜の飲み会などで話をした人もいます。そう考えると、普段の学会に比べればハードルも低く感じられ、割と気楽に話し掛けることが出来ます。自分が全く知らない分野のポスターも多く、話をちゃんと理解できずにトンチンカンな質問で困らせてしまった方もいるかもしれ

ません。でも、そうした相手の話の要点を的確に掴む力や質問力というのは、実践でしか身に付かないものだと思います。恥のかき捨てだと思ってどんどん話しかける。ポスターを遠くから眺めて終わってしまうのと同様に、随分楽しい時間を過ごすことができました。ビールを片手にズラリと並んだポスターの間をフラフラしているうちに、お酒が回って強気になり、最終的には「いちゃもん」をつけるような感じになっていたかもしれませんが、それもまた一興ということであらう。

夜の飲み会、ある研究者の方からこんな話を聞きました。自分が若い頃、ポスター発表の際には「ちょっとでいいですから、話を聞いてください！」と先生方の腕にしがみついた…と。発表する側になると、今度はお客さんを捕まえることが大事です。「ぶんせき秘帖」では、私もポスター発表を行いました。始めは全然人が来ませんでした。先程の話のように、いきなり知らない人の腕にしがみつくのも抵抗があるので、夜の飲み会で知り合った学生のところへ行ってみることに。彼の

発表を一通り聞いた上で自分のところへ連れて来るといって手に出てみました。ポスターの前で説明しだすと、人がちらほら寄って来て、その後は終了時間までお客さんが途絶えませんでした。アピールすることの大切さを、その身で実感。また、聞きに来て頂いた人のほとんどは、私と違う分野の方。研究室でのディスカッションとは異なる切り口の質問や意見を頂き、自分自身の研究の見方・考え方の幅を広げられた気がします。

ポスター発表にまだ挑戦したことのない方や苦手だと思える方は、気さくな雰囲気での発表できる「ぶんせき秘帖」に参加してみたい方が多いでしょうか？研究室を飛び出しての他大学の学生との交流は、それだけでも良い刺激になります。拙い文章でどこまで読み手の皆さんに伝えられたか自身はありませんが、興味をもたれた方はぜひ来年参加して、一緒に楽しみましょう！来年度の「ぶんせき秘帖」が盛大に行われることを期待しております。

***** 日本分析化学会近畿支部 *****

あとがき：大学では後半戦がスタートしました。今回のぶんきんニュースは、夏の一大イベントぶんせき秘帖の特集です。講演者とポスター賞受賞者に記事を執筆していただきました。みなさま、お忙しい中ありがとうございます。今号は、前号以上のページ数となりました。さらによりよい紙面にするため、ぶんきんニュースでは皆様のご意見・ご要望をお待ちしています。（高橋 弘樹）